ジェツン・チューキゲーツェンの宗義書

――無　我――

高田順仁

ゲルク派の学僧の手になる宗義書のうち、比較的初期に著されたものの一つとして、ジェツン・チューキゲーツェン rJe btsun chos kyi rgyal mtshan (1469–1544)[1]の『宗義の設定』*Grub mtha'i rnam gzhag* がある。[2]本書は、わずか十五葉（セラ寺版）に仏教四大学派――毘婆沙師[3] (Bye brag smra ba, Vaibhāṣika) と経量部 (mDo sde pa, Sautrāntika)と瑜伽行唯識学派(rNal 'byor spyod pa ba, Yogācāra) と中観学派 (dBu ma pa, Mādhyamika)――の教理が「定義」「分類」「語義説明」「対象の考え方」「対象を有するものの考え方」「無我の考え方」「地と道の設定」の七つの項目をとおして説明される。[4]本宗義書をもって、特定のことがらに対する仏教四大学派それぞれの主張を比較することは容易であり、延いては最も上位におかれる学派である中観派、特には帰謬論証派 (Thar 'gyur ba) の教理の特徴を理解する手がかりを得ることができる。

すべての仏教四大学派は無我の教説を主張する。[5]しかし以下翻訳を試みる『宗義の設定』が示すように、仏教四大学派による無我の理解はそれぞれ異なっている。同文献によれば、帰謬論証派の無我理解の特徴は、人無我と法無我における無我の意味をともに「諦として空である」(bden pas stong pa)と理解するところに求められる。[6]

以下本稿では、『宗義の設定』より仏教四大学派の「無我の考え方」(bdag med kyi 'dod tshul)を説明した部分を抜粋して翻訳を試みることにしたい。「無我の考え方」は、声聞と独覚と菩薩の修道体系を説明する「地と道の設定」に先だって、三者のそれぞれが主として修すべき

とこころである無我の見解を明らかにすることを目的としている。底本には *TEXTBOOKS OF SE-RA MONASTERY for The Primary Course of Studies*, edited by Tshulkrim Kelsang & Shunzo Onoda, Nagata Bunshodo, Kyoto, 1985, pp. 90–97 所収のセラ寺版を用いた。

註

① rJe btsun chos kyi rgyal mtshan (1469–1544) は 'Jam dbyangs Don yod dpal ldan (1445–1524) の後継者として、羊年の年（一五一一）から庚子の年（一五四〇）まで、セラ・チェー学堂の指導にあたられた人物である。

dDe legs nyi ma（一六世紀）、*rJe btsun chos kyi rgyal mtshan dpal bzang po'i rnam par thar ba yongs su brjod pa'i gtam du bya ba dngos grub kyi char 'bebs*, 16 b 2:

mKhas grub Don yod dpal ldan gyi rgyal tshab tu mKhas snyan grwa tshang gi 'chad nyan la dgung lo zhe gsum pa lcags mo lugs gi lo la phebs par mdzad do /

ibid., 22 b 6–23 a 1:

byi'i ba'i lo grwa tshang gi 'chad nyang la dpal chos rje Shes rab seng ge bskos nas / bdag gi chen po rang gzims khang du bcar bzhugs mdzad.....

彼の著作の多くはセラ・チェー学堂の学堂教科書として用いられている。『宗義の規定』(abbr. JTGT)もその一つである。Cf. *Materials for a History of Tibetan Literature*, Lokesh Chandra, New Delhi, 1963 (reprinted by Rinsen Book Co., Kyoto, 1981) No. 15593.

② 本書 (*A Catalogue of the Tohoku Collection of Tibetan Works on Buddhism*, Tohoku University, 1953, No. 6862) の著作年代は知られてはいない。同時期のゲルク派の学僧の手になる宗義書として、Dalai II dGe 'dun rgya mtsho (1475–1542) の *Grub mtha' rgya mtshor 'jug pa'i gru rdzings*, 13 fols, (Tohoku No. 5573) と Pan chen bSod nams grags pa (1478–1554) の *Grub mtha'i rnam gzhag blo gsal spro ba bskyed pa'i ljon pa phas rgol bra8 ri 'jons pa'i the ba*, 17 fols がある。

③ 「毘婆沙師」という呼称は、宗義文献では、部派分裂によって生じた十八部派すべてを含めた呼称として用いられているが、特には説一切有部を指す。例えば、「毘婆沙師」という学派名に対して『大毘婆沙論』*Bye brag bshad mdzod chen mo* にしたがって宗義を語るもの」及び「三世を実体の事例 (bye brag) として語るもの」という語義説明が与えられている。Cf. JTGT, 2a 1–2; 池田練太郎「チベットにおけるアビダルマ仏教の特色」東洋学術研究一一一一一一、一九八一、p. 133.

④ Cf. 立川武蔵『西蔵仏教宗義研究』第一巻東洋文庫一九七四、p. 42 序論註Ⅲ、二〇。

⑤ 仏教四大学派の無我の見解については、*Meditation on Emptiness*, Jeffrey Hopkins, London, Wisdom Publications, 1983, pp. 213–274 等及び Elizabeth Napper, *De-*

pendent-Arising and Emptiness, London, Wisdom Publications, 1989, pp. 44-49 において既に考察されている。また、J. Hopkins, ibid., p. 299 Chrt 37 には、仏教四大学派の無我理解をまとめた一覧表が与えられている。

⑥ dkong 'jigs med dbang po は、帰謬論証派の無我理解の特徴を次のように記述にまとめている。

Le *Grud mtha' rnam bzag rin chen phreṅ ba* de dkong 'jigs med dban po (1728-1791). Texte tibétain édité, avec une introduction, K. Mimaki, *ZINBUN* No. 14, 1977, p. 105 :

gang zag gi bdag med phra mo daṅg / chos kyi bdag med phra mo gnyis la phra rags med ciṅ gnas lugs mthar thug tu 'dod do // (詳細な人無我と詳細な法無我には詳細と粗雑〔の差異〕なく、〔ともに〕窮みにまで達した実存形態 (i. e. 空性) であると認める。)

⑦ 例えば、JTGT はよれば、毘婆沙師は、声聞と独覚と菩薩はともに、人無我の理解に習熟することにより、それぞれの菩提を体得する、と理解する。同じく瑜伽行唯識学派は、声聞及び独覚の種姓を有するもの達は、人無我の理解〔のみ〕を修し、〔大乗の〕菩薩達は法無我の見解を〔も〕修する、と理解する。一方、帰謬論証派は、断じられるべき主なものについては相違があるとしても、声聞と独覚と〔大乗の〕菩薩の三者は、人無我及び法無我を等しく修する、と理解する。Cf. JTGT, 3a 6-3b 3 ; 9b 5-10a 2 ; 14b 1-2.

〔和訳〕『宗義の規定』より「無我の考え方」

【毘婆沙師の見解】fol. 3a 1-3.

第六「無我の考え方」は〔次の通りである〕。詳細な (phra mo) 無我と詳細な人無我は同義 (don gcig) であると認め、法無我を容認しない。なぜなら、この〔学派〕は〔存在〕根拠が成立している (gzhi grub)① のなら、法我であることにより遍充されていると認めているからである。

それら〔十八部派 (sde pa bco brgyad) の〕中、犢子部 (Vātsiputriya, gNas ma bu'i sde) は常であり、単一であり、独存であるものとして空である (rtag gcig rang dbang can gyis stong pa) 人無我〔のみ〕を認め、自足的な実有として空である (rang skya thub pa'i rdzas yod kyis stong pa) 人無我を容認しない。その〔部派〕は蘊と本性 (ngo bo) は同一である、あるいは別異である、常である、あるいは無常であるといかようにも表現できない自足的な実有である自我を認めているからである。

【経量部の見解】fol. 7a 4-5.

第六「無我の考え方」は〔次の通りである〕。人が常であり、単一であり、独存であるものとして空であること

が粗雑な（rags pa）人無我であり、人が自足的な実有として空であることが詳細な人無我であると認め、毘婆沙師と同じく、法無我を容認しない。

【瑜伽行唯識学派の見解】fol. 9 b 3.

第六「無我の考え方」は〔次の通りである〕。粗雑な〔人無我〕と詳細な人無我の定義の根拠（mtshan gzhi）を規定するあり方については、自立論証派に至るまで〔同じである〕。しかし法無我の定義の根拠を、例えば色は色を把握する正しい認識手段とは異なった実体として空である、という〔意味での〕空性（gzugs dang gzugs 'dzin tshad ma rdzas gzhan gyis stong pa' i stong nyid）であると〔規定〕する。[2]

【自立論証派の見解】fol. 11 a 6–11 b 4.

第六〔「無我の考え方」は次の通りである〕。人が常であり、単一であり、独存であるものとして空であることが粗雑な人無我であり、人が自足的な実有として空であることが詳細な人無我であると認める。瑜伽行中観派（rNal 'byor spyod pa' i dbu ma pa）によれば、〔法無我は粗雑なものと詳細なものの二種に分けられる。〕なぜなら、色は色を把握する正しい認識手段とは異なった実体として空であることが粗雑な法無我であり、[3]あらゆるものが諦として空であること（chos thams cad bden pas stong pa）が詳細な法無我であると認めているからである。

二種の無我を否定対象（dgag bya）の看点から分類するのであるが、空の基体（stong gzhi）[4]の看点から分類するのではない。なぜなら、基体である人のもとで否定対象である諦として成立していること（bden grub）が否定されていることが詳細な法無我であり、基体である人のもとで自足的な実有として成立していることが否定されていることが詳細な人無我であるからである。二種の我執を把握形態（'dzin stangs）の看点から分類するのであるが、所縁（dmigs pa）の看点から〔分類するの〕ではない。基体である人を所縁として諦として成立していると把握することが法我執であり、基体である人を所縁として自足的な実有として成立していると把握することが人我執であるからである。

【帰謬論証派の見解】fol 1. 13 b 6–14 a 5.

第六「無我の考え方」は〔次の通りである。〕人が自足

的な実有として成立するものとして空であること⑤が粗雑な人無我であり、人が諦として空であること（gang zag bden pas stong pa）が詳細な人無我であると認める。〔法無我は粗雑なものと詳細なものの二種に分けられる。なぜなら〕〔方向的〕区分を有さない原子からなる粗大なものとそれを把握する正しい認識手段とは異なった実体として空であること（rdul phran cha med bsags pa, i rags pa dang / de 'dzin pa' i tshad ma rdzas gzhan gyis stong pa）が粗雑な法無我であり、〔人の〕施設の基体である蘊が諦として空であること（gdag gzhi phung po gzhi bden pas stong pa）が詳細な法無我であると規定されているからである。

二種の無我を空の基体の看点から⑥分類するのであるが、否定対象の看点から分類するのではない。基体である人のもとで否定対象である諦として成立していることが否定されていることが詳細な人無我であり、基体である蘊等のもとで否定対象である諦として成立していることが否定されていることが詳細な法無我である。二種の我執を所縁の看点から分類するのであるが、把握形態の看点から分類するのではない。基体である人を所縁として諦として成立していると把握することが人我執であり、〔人の〕施設の基体である蘊等を所縁として諦として成立していると把握することが詳細な法我執であると規定されているからである。

訳註

① gzhi grub は、セラ・チェー学堂で用いられるドゥラ書（*Yongs 'dzin bsdus grwa*）では、tshad mas grub pa（正しい認識根拠により成立しているもの）と定義され、「知られるもの（shes bya）」「存在しているもの（yod pa）」「〔正しい認識手段の〕認識対象（gzhal bya）」と同義であるとされる。Cf. 拙稿「ドゥラ書における存在規定」密教学研究第22号一九九〇 p. 11 註㊱）JTGT は毘婆沙師の「対象の考え方」の中で、shes bya 及び yod pa は dngos po と同義であると規定する。したがって、ここでの gzhi grub は dngos po と同義である。Cf. JTGT 2 a 2-3.

② JTGT は瑜伽行唯識学派の「対象の考え方」の中で、詳細な法無我の定義の根拠として、ここに指摘されるものとともに、色は〔これは〕色であると言語表現がなされる機能の基体としては、独自の相として成立しているものとして空であるという〔意味で〕の空性（gzugs gzugs zhes pa'i sgra 'jug pa'i jug gzhir rang gi mtshan nyid kyis grub pas stong pa'i stong nyid）を挙げている。Cf. JTGT 8 a 5-6.

③ Jeffery Hopkins の表にあるように、経部行中観派（mDo sde spyod pa'i bdu ma rang rgyud pa）は粗雑な法無我

を設定することはないとされる。

④ stong gzhi は『蔵漢大辞典』では stong nyid gtan la 'bebs pa'i gzhi ste shes bya'i chos mtha' dag（空性を決定する〔場合の〕拠り所であり、〔例えば〕知られるものであるあらゆる法）と説明される。松本史郎「空」（岩波講座東洋思想第九巻『インド仏教2』岩波書店一八八八、pp. 217-241: pp. 220-221）によれば、「Aは空である」といわれるときの「A」が空の基体である。

⑤ JTGT, 13 b 6: …… rdzas yod kyi grub pa'i stong pa とあるが、rdzas yod kyis grub pas stong pa と改めた。

⑥ JTGT, 14 a 2: stong bzhi'i sgo nas とあるが、stong gzhi'i sgo nas と改めた。